

---

# 皆伝

ゆめうつつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

皆伝

### 【著者名】

ゆめづつり

### 【ZINEID】

Z2261E

### 【作者略】

### 【あらすじ】

十六年もの間、師匠である臥龍斎と共に山中で暮らし、剣の修行をする少年、咬陀。最後の試練は何と、育ての親との死闘！哀しみの果て、彼は山を降りて行く。

(前書き)

クリヤヰターズ同盟さんの『回路解放!』に投稿したものを転載するに当たり、加筆修正しました。

「何故……ですか」

俺は今、養父でもある臥龍斎師匠と対峙していながら、戸惑いを隠せないでいた。

「問答無用。儂を殺さねば、お前が殺されるのみ……」

今までの十六年間が嘘のように、冷徹な気迫が師匠を包んでいる。俺は赤児の時に、この山へ棄てられていた。と師匠から聞いてい る。

記憶の中の師匠は厳しくも暖かく、何より優しかった。両親のいない僕にとっては、ただ一人の身内である。慕い、敬つてきた師匠を殺すなんて出来る訳がない。

不意に何かが頬を掠めた。

次第に熱く疼き、滲み出たソレは顎を伝つて滴り落ちる。

触れた指先は滑り、金属に似た特有の香りが鼻腔をくすぐる。

「血……」

刀が頬を切り裂いたのだ、と気がつくのに刹那を要した。

「咬陀よ。

死合いの最中、物想いに耽るよりでは、お王、死ぬるぞ

本気だ……。

全身の皮膚が粟立ち、背筋が冷たいモノで波打つ。

戦慄。でも、それだけではない。体奥から込み上げる昂揚感。

深く大きく一つ息を吐き、覚悟を決める。

そうすると不思議なもので、あらゆる雑念は消え、自分でも信じられないほど落ち着いてきた。

乱れていた息が整い始め、汗が引いていく……。

俺は刀を構え直し、気迫を込める。

そして再び、真っ向から対峙した。

「やれやれ。やつと、その気になリおつたか  
言葉と共に、師匠の気勢が増す。

互いに隙がなく、動けない。そのまま睨み合ひ少しへ数合。

先に動けば殺られる！

おも  
念いが焦りを生み、次第に重く伸び掛かる。

微動だに出来ない体を、またしても汗が流れしていく。

滝のように幾筋も……。

だが、それは師匠も同じらしい。

勝負は一瞬。多分、一太刀で終わるだろ？

ふと、師匠の顔から険が消えて、代わりに笑みが浮かぶ。

それを見て、ほんの僅か、俺の気が緩む。

その隙を突いて、師匠が裂帛の気合を込めて動いた。

一呼吸、有るか無いか。

刃、一閃。師匠は突きを、俺は反射的に抜き胴を放ち、互いの位置が入れ替わる。

俺は、そのままの姿勢で暫く動けなかつた。恐らく師匠も……。

数瞬のち。左肩に痛みを、次いで血飛沫が僅かに上がる感触を覚える。

「見事だ。咬陀よ……」

背後で師匠の声が聞こえ、床に重い物が叩きつけられる音が響く。

俺は、眼から溢れゆく涙を抑えられなかつた。

切つ先は、肉が裂ける鈍い手応えを確かに伝えていた。

手が……腕が……震えて止まらない。

緊張と恐怖で硬く強張り、自分の物とは思えないほどに重く、ま  
まならない体を必死で動かして振り向き、師匠の元へ歩み寄る。

跪き、師匠の体を注意深く抱き抱える。

大量の……ヌルリとした血の感触は、師匠が助からないだらつこ  
とを予感させた。

「師……」

師匠、と叫びたいのに悲しみや後悔や諸々の感情で喉が詰まつて、  
言葉が出ない。

「強く……なりおつたな。咬陀よ……」

俺の声を聞いてか、師匠が眼を開け、話しかけて来た。

「師……」

俺は、そう言いかけて首を振る。

「親……父……死ぬ、な……死なないでくれええつ！ 親父いつ！」

俺の叫びに師匠……いや、育ての親父は驚いたように眼を見張る。  
ほんの一瞬だけ。

それから、フッと力なく相好を崩した。

「儂を……親父、と……呼んでくれるか……」

初めてだな。と呴く親父の眼に、涙が浮かんでいた。

「思えば、十六年……。何、一つ……父親、らしくこと……してや  
れな……かった、な……。」

赦、して……くれ、咬……陀。

それと……いつの……間にか、大きゅう……なりおつて。儂は、  
嬉……しい……ぞ」

ゼイゼイと荒い息を吐く合間に喋る親父。  
その呼吸が次第に浅く、速くなつていく。

小さい頃の想い出やら何やらが蘇り、俺の口から知りず知りずの  
内に嗚咽が漏れる。

「親父……親父……まだ、逝くな。俺……まだ一緒に暮らしたい。  
剣の師匠じゃなく、親父として……」

眼を閉じゆく親父の意識を、何とか繋ぎ止めようと、俺は必死で  
呼び掛けた。

「そう……か……。済まん……。それ、と……今まで……ありがと  
う、な。咬陀……。免許……皆……伝……じゃ……」

血に塗れた右手が一度だけ、俺の頬を優しく撫でた後、力なく地  
に落ちる。

「お、親父？……親父いいつ！」

山々に響き渡るが如く、俺の絶叫が辺りに木霊した。

俺の願いも空しく、二口ひと段らかな微笑みを浮かべたまま、親  
父は……逝つてしまつた。

哀しみに打ちひしがれながらも親父の身辺を整理すると、秘蔵の  
酒と共に、俺宛の手紙が見つかった。

読んでみると、生前 多分、最後の修行の前だらつ に書い  
たものらしい。

『咬陀よ。もし、これを読んでいたのなら、お前に免許皆伝を授け  
た儂は、生きて居らんだろう。』  
だがな、咬陀。驕るでないぞ。

己より強い者は、この世に幾らでも居る。  
精進を怠れば生き残ることなど、あたわぬじやろつ。  
用心せいや。

しかし、儂にも少しばかり心残りがある。

それは、お前に父親らしいことを何一つ、してやれなかつたことじや。

せめて、一緒に酒を酌み交わしたかつたの『

抑えていた涙が溢れ出し、文字を滲ませる。

「親父……死んでからの孝行で、本当に申し訳ない」

俺は親父の亡骸に、そう前置きすると、俺と親父の分の茶碗を二つ用意して、親父秘蔵の酒の封を切つた。

それから、一つを亡骸の前に置き、もう一つを手に取つて、それに酒を注ぐ。

そして、死に水代わりに酒で親父の口許を湿してやり、俺は生まれて初めて口にする酒を一気に呷<sup>あお</sup>る。

喉がカラカラとあつくなり嘔せた。

嘔せながら大声で泣いた。泣きながら酒を呑み、また嘔せた。何度も繰り返すと、漸く落ち着いて呑めるようになった。

親父を土に埋め、また酒を呑み、独り言のように親父との想い出を語る。

そうして一晩、呑み明かした。夜が白む頃には親父との別れを終え、眠りに就いていた。

目が覚めてから俺は、親父であり師匠であつた臥龍斎の刀を形見として携え、山を降りる。

ただ一度、足を止め、頂上を振り仰いで親父に誓う。

「俺……親父が伝えてくれた剣術で、きっと国一番の剣豪になる。待つてくれよ、親父！」

「達者でな、咬陀……」

背を向けて再び歩を出した時、俺を見送る親父の声を聞いた気がした。

(ア)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2261e/>

---

皆伝

2010年10月10日07時17分発行